青少年 はちのへ
かがみ
青少年健全育成シンボルマーク
さっぱりにみんなで育てよう青少年を
八戸市

【発行】 第66号
八戸市教育委員会教育指導課
八戸市内丸一丁目1－1
TEL 43-2111 内線457
平成20年11月17日号

『万能感』から、『自己特性』へ

人間は、幼いある時期に「幼児的万能感」を持つと言われています。このことに関して、精神科医の斎藤環先生は、次のように語っています（一部要旨抜粋）。

> 幼児的万能感とは、自分が駄々をこねれば周囲が自分の欲求を叶えてくれると思うことなので、駄々がいつまでも通るかぎり成熟しないのは当然である。子どもは成長とともに、父親をはじめとする他者との関わりを通して、『自分が万能ではないこと』を受け入れなければならない。それを受け入れることで、より現実的で社会的な欲望へと変換され、成熟していく。つまり、他者と関わる必要性を理解し、社会的システムに参加するようになる。これはすべての人間社会に普遍的な掟ということができる。ここで忘れてならないのは、子どもに受け入れさせるには、他者から強制されなければならないということだ。

赤ちゃんは泣くことで自身に関心を集め、欲求を満たしてくれる母親という存在を自分の支配下に置いてしまいます。失敗も挫折も知らないで育っていく幼児は、この世の中で自分が一番であり、自分が望むものはすべて与えられるし、自分にできないことはないと思っています。しかし、成長に伴ってさまざまな現実に直面することで葛藤や挫折にぶつかり、自分の思い通りにならないという体験を積み重ねるようになります。そのことを通して現実を検討する力や、等身大の自分を認識できるようになるといわれています。

保護者が、我が子の可能性を信じるのは当然のことです。しかし、我が子が生き抜く力を付けるためには、重要な通過点として『万能ではないこと』を受け止めなければなりません。では、そこを通過しないとどのような青年になっていくのでしょう。

いろいろなカウンセラーから、思春期以降もこの「幼児的万能感」から抜け出すことができない若者が増加しているという意見が寄せられています。そのような若者達は、自分の失敗を他人のせいにし、自分には能力があるが今はやらないだけであり、やればできると考えています。物事を成し遂げるための難しさや要する努力の量を見積もらない「根拠の無い自信」を持っているそうです。

大切なのは、挫折させないことではなく、挫折したときの具体的な寄り添い方を持つことです。そのためには、子どもと日頃から時間と意識を共有し、話を聞き、焦らずにその子の成長段階を見極めながら、我が子の特性を見抜くことです。その特性を保護者が認め、子どもに伝えていくことが、子どもにとっては肯定される自分であり、自分の特性（持ち味）の理解につながっていきます。

子どもが成長過程で挫折したとき、無能感を味わい無気力な状態にしないために、周りの大人が、その子の特性（持ち味）を理解し、しっかりと寄り添っていきたいものですね。

八戸市青少年健全育成『市民の集い』に参加してみませんか？

全国青少年健全育成強調月間の１１月に、青少年の健全育成を市民総ぐるみで推進するために、「市民の集い」を開催します。

当日飛び込み参加でかまいません。お気軽にご参加下さい。お待ちしております。〔無料です〕

〔問い合わせ〕0178-43-2111（内459）岡田

〔日時〕平成20年11月27日(木) 14:30～16:00
〔場所〕八戸市公会堂文化ホール
〔主催〕八戸市青少年健全育成「愛の一声」市民会議
〔内容〕地域活動発表(白山台中、湊青少協)
児童生徒弁論(お話弁論、防犯弁論の最優秀)
郷土芸能発表(高館小) など

地域の支えで、今年もグッジョブウィーク

今年で９年目となる「さわやか 八戸 グッジョブウィーク」が、中学２年生を対象に市内１９校で実施され、およそ２１００名が参加しました。数日間の職場体験や福祉・ボランティア体験から、豊かな感性や創造性と共に自律性を高め、自分なりの生き方を見つけていくことを目的としています。そして、この事業は、「地域の子どもは地域で育てる」という視点が重要となりますので、学校だけで実施することなく、学校・家庭・地域の三者がそれぞれの役割を明確にし、準備段階からの連携が不可欠となります。特に、保護者が、家庭での子どもの変化やささやかな成長に気づき、認め、話し合い、子ども達の感受性を高めていくことが必要です。

グッジョブウィークを保育園で体験した長者中２年夏堀詩梨さんの感想文を紹介します。

今回のグッジョブを通して、大人の人たちの仕事の大切さを実感することができました。また、笑顔で明るく接すると園児も安心し、豊かな心でふれ合うことができることを知ることができました。

はじめは子どもたちのほうもびっくりしていて、どう接していいかわかりませんでした。しかし、子どもたちのほうから話しかけて来て受け入れてくれたので、とてもうれしく思いました。それから何かをしてあげると、一つ一つのことに「ありがとう」と小さい声でも言ってくれました。こんなに小さい子でも、「ありがとう」の一言に感謝の心をこめて伝えてくれます。そして、その言葉に仕事のやりがいを感じることができました。どんなにつらい仕事をしていても子どもたちの輝やかしい笑顔が目に入ると、やる気が出てきました。

また、園児との身長の差を意識することも学びました。はじめは話すときも立っていましたが、それでは園児たちも目線をあげなくてはならないし、怖さも感じられるので、一日目はかわいそうなことをしてしまったなと反省しました。次の日からこのことを胸に置いて園児と話すときの目線を考えてみると、話し手の気持ちもよく伝わり、顔には自然と笑顔があふれていたので、目線の大切さをよく知ることができました。

それから今回は接する相手が子どもということで、ちょっとした言葉遣いや、行動を考えなければなりませんでした。子どもたちはこれから学んでいくことがたくさんあります。ですから、まわりの大人がやっていることが正しいことだと思い、すぐにまねをします。どんなに危ないことでもまわりの人たちがやっていると、興味を持ち、やろうとするのです。ですから、子どもたちの前では行動、言葉遣い一つ一つを考えて行わなければならないと思いました。

私はこのグッジョブを通して、大人の人たち、つまり親の仕事の重み、笑顔の大切さを学ぶことができました。親にはもっと手伝いをして助けてあげたいし、笑顔で疲れをやわらげたり、相手の心を和ませてあげられるようになりたいです。

他にも、「本気で取り組むことの大切さがわかった」「自分でやらなけれは、次に進めないことがわかった」「自宅での手伝いが楽に感じるようになった」などの感想が寄せられています。

保護者からは、「グッジョブ体験後、やさしくなった」「学校以外の集団の中でも、順応できることが分りうれしい」「人の心の温かさに気づいたことに感謝」などの意見がありました。

協力事業所からは、「素直」「日に日に進歩する」「職場が明るくなる」などの好感をもっていただいた反面、「私語」「あいさつの個人差」「言葉遣い」「行動の遅さ」等の課題もいただいています。

〔写真は、下長中と長者中の、今年度の活動のようすです〕